

2018
おもろ
チャレンジ

アマゾン源流域で「生」の熱帯林保全を学ぶ

農学部 3年

福山 亮部

エクアドル

2019年2月21日-

2019年3月15日



渡航概要と内容

- 渡航先はエクアドル共和国。Jatun Sacha という熱帯林保護活動を行なっている NGO の施設にボランティアとして滞在し、当地での保全活動を視察しました。自然保護には大きく分けて、保全（ある程度手を加えながら管理する）と保存（もともとあるものに手を加えない）がありますが、Jatun Sacha で行われているのは保全にあたります。アマゾン川支流、ナポ川のそばに位置する Jatun Sacha の保全施設には欧米を中心に国内外からボランティアがやってくるそうですが、私の滞在時は基本的にエクアドル人のボランティアが2名いたのみで、外国人は自分だけでした。施設のスタッフはほとんど英語が話せず、意思疎通には苦労しましたが、現地の大学生の助けなどもあり必要最低限のコミュニケーションは取ることができました。普段行う仕事は、林道の整備や草刈り、植樹用のタネや苗の収集、農地の開墾、家畜の餌やりなど様々でした。肉体労働が多く、長距離移動で疲れた体にはなかなか応えました。ボランティアでは当地の自然や植物について教えてもらうこともあったのですが、建材、資材のほか、薬用、呪術的な用途についても教えてもらうことができ、現地の人々が深く自然に根付いた生活を送ってきたのだということが感じ取れました。また、夜間や休日といった自由時間には林内を散策し、生物の観察も行うことができました。ハキリアリやモルフォ蝶、オオハシといった著名な生き物が数多く見られ、自分がアマゾンにいるのだという実感がさらに湧きました。特に両生類・爬虫類の多様性は素晴らしく、かの有名なヤドクガエルの仲間や、猛毒を持つサンゴヘビの一種、ニシキヘビの仲間であるボアの一種なども



見ることができ、当地の環境の豊かさを感じる
ことができました。

- 今回の渡航では、序盤に荷物の盗難に遭うという不運に見舞われました。状況を鑑みるに長距離バスの運転手と盗人が手を組んでいた、常習的な犯行だったものと思われます。詳細な状況を記しておくので、今後このような国に行かれる方の参考になればと思います。



今回乗ったバスは首都のキトから、アマゾンの玄関口テナに向かう6時間のバス。首都近郊のバスターミナルから出発でした。混雑するバスターミナルには300人以上の人がいましたが、見たところ外国人は自分くらい。警戒しながらバスの発着場所で待機しました。受入先のコーディネーターには、網棚や足元に置くと盗難のリスクがあるため、バスの下の貨物室に荷物を預けるようアドバイスを受けていました。到着したバスの運転手にメインザックとサブザックを預け、最低限の貴重品だけ持ってバスに乗車。ひとまず安心です。



乗車すると運転席の側に1人の男が立っていました。エクアドルでは乗務員が私服のことが多かったため、この男も乗務員なのでしょう。チケットと荷物預かり券を見せるように要求され、ここに座るようにと、席まで案内されました。席に座り、券を返してくれと言うと、なぜか乗車券しか返してくれない。荷物預かり券は最後まで預かっておくというように説明されました。明らかにおかしい。この時点でこの乗務員が偽物なんじゃないかという疑いを持ち始めました。

ひとまず預け荷物を片方回収しようと考えました。荷物を取るからと伝えて預かり券を取り戻し、運転手に、サブザックを回収したいと頼むことに。しかしなぜか荷物を回収させてもらえない。彼の言い分では、①荷物はもう預け済みだから回収できない、②メインのザックとサブザックは互いに結んであるから取ることはできない、③自分がここで見張っているから大丈夫だ、との説明。結んであるとは言え、ゆるい一重片結びで、簡単に解けるんだけど...。そもそもなんで渡してくれないのか意味がわからない。とはいえ運転手もなかなか引き下がらないので、これ以上はトラブルの元になると判断。この荷物が自分のものだという念押しをしてから、仕方なく席に戻りました。

自分の席に戻り、バスの出発を待つ間にも疑念は晴れず、念のためサブザックに入れていたSIMフリースマホにテザリングで接続し、状況を把握しておくことに。持ち去られれば接続が弱くなるためすぐにわかるという算段です。運転手が荷物見てるし流石に大丈夫でしょうと思っていたのですが...

その5分後、接続がどんどん弱くなっていく。どう考えてもスマホとともにサブザックが持ち去られているとしか思えない。急いでバスの外に出ると、運転手は荷物を全く気にかけず、出入口付近でぶらぶらしていました。荷物を見せるように言うと、案の定サブザックが無くなっている。その上隣にある別の荷物を指差して、これがお前の荷物だろ?と言い出す始末。10分前に一緒に荷物を確認したとは思えないあり得ない言動でした。盗んだ奴を探そうとしようにも、混雑したバスターミナル。少し探した程度では見つかるはずもありません。警察を呼べと運転手に言うも、警察は呼べないとの一点張り。おそらく盗人とグルなのでしょう。しかし証拠もないのでどうしようもありません。仕方なくバスに乗り込み、アマゾンへと向かうこととなりました。到着してすぐに現地警察へと向かい、事情聴取やバス運転手への取調べを行っていただきました。保険金請求に必要な盗難証明書を発行してもらい、ひとまず後始末を終えました。盗られたものはPC、SIM フリースマホ、予備のカメラ、予備の現金とデビットカードといった所です。痛いダメージでしたがなんとか旅は続けられました。

今回は最低限必要なパスポートや財布、iPhone は身につけていたため、守ることができました。また、盗まれたことにすぐ気付くことができ、カードの停止やパスワード変更などを速やかに行うことができたのも不幸中の幸いといったところでしょうか。

今後似たようなケースに遭遇したら

- ①荷物預かり券は絶対に見せない。必要無い場面で荷物預かり券を要求してくる乗務員は偽物だと疑うべき（実際そのあと乗った他のバスでは一度も要求されなかった）
 - ②偽乗務員の写真を撮っておく。抑止力として働くほか、実際に盗難が起きた時、警察に見せる証拠にもなる。
 - ③本当に貴重なものは身につけられる範囲で身につけておく。チャック付きポケットのある服があると安心。
- などの対応をとろうと思います。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回の渡航で感じたのは、現地で行われている環境保護や、エコツーリズムの危うさでした。ガラパゴスやアマゾンといった世界でも有数の生物多様性ホットスポットを抱え、毎年数多くの観光客が訪れているものの、エクアドル国民の所得は南米でも最低クラスに当たります。環境保護よりも経済を優先せざるを得ないため、現在でもプランテーション化や資源の掘削のために多くの森林が切り開かれています。Jatun Sacha のような民営の保護団体もいくつか存在していますが、経済的な面からも経営は厳しいようで、活動が休止している団体も数多く存在しているようです。また、Jatun Sacha の滞在の後に、エクアドルでも有数の観光地である Mindo を訪れた際には、観光客が数多く入ることにより環境の悪化も起きているという話を現地のガイドからも受けました。そのような厳しい状況でも、自然を維持していくことを考え、活動している人たちがいるということに、強い感銘を受けました。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回訪れたエクアドルでは、森林を伐採して作った農地で、多くのバナナやカカオが生産され、それが日本を含む多くの国へと輸出されています。そういった商品を購入しないというのは無理にせよ、フェアトレードや環境団体と連携を行なっている商品があれば、そのようなものを積極的に選んでいこうと感じました。また、先進国にいる私たちは、地球温暖化防止のためだとか、生物を守るためだとかの理由で、森林保護を叫んでいることが多いですが、そういったことを当事者である途上国の人々に求めるのは酷なようにも思いました。経済的に貧しいこれらの国の人々が、生活のために森林を破壊して作物や資源を得ることは、ある程度仕方ないように思います。だからこそ、寄付などによる経済的支援や、エコツーリズムで現地にお金を落とすことなどが、持続的な森林保全のためには大切になってくるのではないかと思います。僅かな力ではありますが、自分一人でもこのようなことを意識し、日々過ごしていくことで、少しでも熱帯林の環境が守られていくためにできることを心がけていこうと思います。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

今回私は現地語（スペイン語）をあまり勉強せず渡航し、かなり苦労してしまったため、これから渡航される皆さんは十分学習してから渡航されることを強くお勧めします。

■ 主な奨学金の使途

- *渡航費
- *雑費（ガイドツアー、用具など）
- *ボランティア参加費（宿泊費・食費含む）
- *その他宿泊費、交通費
- *海外旅行保険、予防接種 など

